

(表面より続く)

快適なドライブ。さすがにトンネルが多い。車で混雑する高知市内を越え、須崎にて昼食、止まつてみて歓迎朝日寺参拝団の文字、偶然にビックリ、りっぱな庭があつた。やつと最初の寺、三十七番札所岩本寺が近づいた。JRの駅から近くの商店街のはずれに寺はあつた。寺の門をくぐると、ちょうどお葬式が本堂で行なわれていた。絶えまないお遍路さんの金剛杖の鈴の音がちよとお葬式には気の毒に思えた。納経を終え駐車場を出た所で見覚えのあるバスに出会う。案外早くやつてきたなあという感じ、先を急ごう。はるかに広がる太平洋、磯に打ち寄せる大きな波を見ながら四国最南端・足摺岬の第三十八番札所。金剛福寺に着く。昔、旅人がやつとここに着き足をさすりながらどこまでも続く青い海を見続けたものか、山の木々も南国そのものだ。さすがに観光客が多い。またバスが迫ってきた。あとはきょう宿泊する延光寺を残すだけという気楽さから、バスの人にはもうしわけないが「見残し」より舟で海底の模様を見学、バスを追う。延光



先発隊の4人

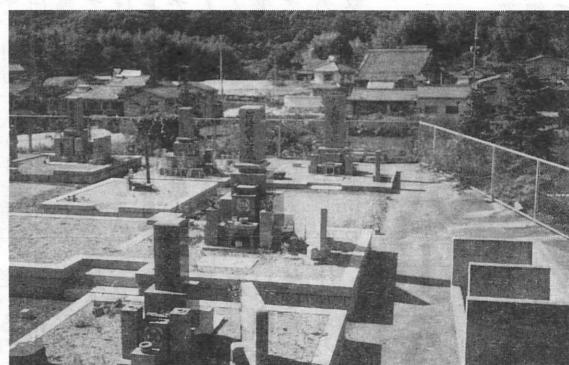
にははしごで登れるようになつてゐる。はじめはかなり急で段と段との間が広いが、けつこうな年の人たちも登つてくる。信仰心で恐さなど感じないのだろう。児玉さんに聞くと、ここにはまだ／＼厳しい行場があるのだそうだ。三日目、石手寺にお参りした。三日間の中でも、もつとも大きいくじ参りの人も多い寺であつた。寺は多くの人の尊崇をうけてこそ繁栄するもの。そのため寺の内にある全ての人に人々を引き付ける工夫がこらされている。例えば石手寺という寺名の中にこの寺と大師さんと又、藩主河野氏との結びつきが込められている。寺宝の石にはお大師さんが書かれたといふ文字がみえ、その石は藩主の世継が母の体内により手に持て生まれたといふ。靈場巡りをして思うが、四国の寺の立派になつてゐる事。「信は莊嚴から」と言われるが、信仰心を引き起こすにたる寺の偉容である。人々の生活が良くなり、平和な時代が続いている事がこのような形になつて現われているのだろうか。平和な時代がいつまでも続く事を望むばかりである。(隆英記)

瀬戸内観音靈場巡り



本堂内陣と藤本氏

天蓋・憧幡整う



墓地より寺を望む

密教婦人会役員

總代會役員

あの世には地獄が有つたり極楽が有つたりと言われますが、極楽とは実は阿弥陀さんのおられる世界です。「阿弥陀の四十八願」と言うように阿弥陀さんは四十八の願いを持つておられます。自分のおはこの事を「十八番」と言いますが、これは阿弥陀さんの第十八番目の願いがだれでもこの仏を信ずる者は極楽へ往生できるという、阿弥陀さんの代表的な願いだからです。簡単に言つたらあの世を代表するふうにします。

十三仏巡り